

【学力向上フロンティアスクール中間報告書】(小学校用)

都道府県名	群馬県
-------	-----

学校の概要(平成15年4月現在)

学校名	藤岡市立藤岡第一小学校								
学 年	1年	2年	3年	4年	5年	6年	特殊学級	計	教員数
学級数	4	4	4	3	4	4	1	24	42
児童数	134	135	131	108	139	125	3	777	

研究の概要

1. 研究主題

<p>確かな学力を身に付けるきめ細かな指導の工夫 - 生き生き算数学習、目指せ My ゴール -</p>
--

2. 研究内容と方法

(1) 実施学年・教科

<p>・3～6年生・算数 中学年の算数から、特につまずきが生じやすいため。</p>

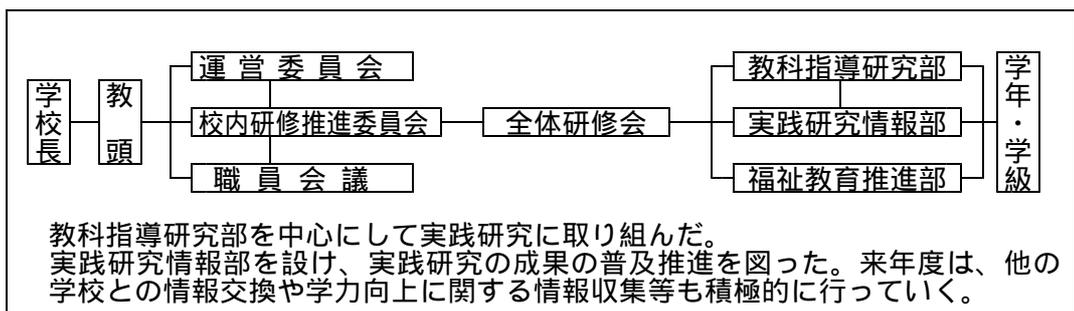
(2) 年次ごとの計画

平成15年度	<p>テーマ 習熟の程度に応じた少人数指導の実施</p> <p>研究の見通し(仮説) ・算数科を中心とした学習活動において、少人数習熟度別学習を導入して、指導体制の工夫や学習の進捗や理解に対応する手立てを講じる指導法等を工夫すれば、児童一人一人に確かな学力を身に付けることができるだろう。</p> <p>研究の内容・方法 算数科における習熟の程度に応じた指導において、中学年を完全習熟度別学習の導入期、高学年を発展・充実期として、次の観点できめ細かな指導の工夫をする。 ・児童が違和感なく習熟の程度に応じて選択できる集団編制の在り方 ・学習に遅れがちな児童に配慮した指導体制 ・学ぶ楽しさを体得できる多様な学習形態の工夫 ・学習意欲を高める自己評価方法の開発等</p> <p>指導形態 少人数指導(習熟度別) 学習形態</p> <p>(3～4学年)1学級を2コースに分け、年間を通して少人数指導を実施した。初めは児童の実態と単元の学習内容に応じ、TTと均等分割を中心に行った。その後、単元ごとに習熟度別に学習集団を編制して学習を進めた。 (5～6学年)2学級を3コース4グループに分け、年間を通じて少人数指導を実施した。学習集団の編成は、常に習熟の程度に応じて行った。</p> <p>コースの内容 〔わくわくコース〕3～6学年 基礎・基本をゆっくり丁寧に身に付けさせる補充コース 〔のびのびコース〕5～6学年 基礎・基本を確実に定着させる基本コース 〔ぐんぐんコース〕3～6学年 基礎・基本の定着とともに数学的思考力を高める発展コース</p> <p>コースの決定方法 単元に入る前に、コースの内容を説明するとともに、レディネステストを行った。そのレディネステストの結果をもとに、児童(及び保護者)にコースを選択させた。児童が自己の習熟の程度に応じたコースを希望していない場合は、教師が適時アドバイスを行うようにした。</p>
--------	--

	<p>指導体制 学級担任2名ときめ細かな指導担当2名により2クラス4グループを指導した。3学年では、1クラス2コースを学級担任ときめ細かな指導担当、教務主任で分担し対応した。</p>
--	---

平成16年度	<p>テーマ 習熟の程度に応じた少人数指導の工夫・改善</p> <p>研究の見通し（仮説） 算数科の少人数習熟度別学習において、児童の理解や学習の進度に対応できる指導方法の確立を通して、児童一人一人に確かな学力を身に付けることができるだろう。</p> <p>研究の内容・方法 算数科における習熟の程度に応じた指導において、中学年を完全習熟度別学習の導入期、高学年を発展・充実期として、次の観点できめ細かな指導の工夫・改善を図る。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・児童の理解や学習進度等に対応できる指導方法の確立 ・習熟の程度の差に応じた学習教材の開発 ・コース別学習における効果的な集団編制の在り方 ・学ぶ楽しさを体得できる多様な指導過程の工夫 ・基礎学力の育成を目指した学習環境の見直し ・学習意欲を高める自己評価方法の開発等
--------	--

(3) 研究推進体制



平成15年度の研究成果及び今後の課題

1. 研究成果

<p>子供たちの学習（算数）に対する意識が変わった。 算数の少人数指導に関するアンケート調査によると、「算数ができるようになった」「自分のペースで学習できた」「楽しく勉強できた」等、子供たちの意識の高まりを感じることができた。また、9割以上の児童が「少人数で勉強すること」「コースに分かれて学習すること」をよいことだと受け止めているがわかった。 「評価」に対する考え方が変わり、きめ細かな指導の方向性が見えてきた。 少人数習熟度別学習を導入したことにより、評価を統一していこうとする意識が高まった。的確な評価を得るためには、その前提として、授業の充実が必要不可欠である。子供たち一人一人のつまずきをなくし、学習について行けない子を作らないという考えのもと、きめ細かな指導に取り組むことができた。 学力向上フロンティアスクールの趣旨を実践に生かした。 習熟度別少人数指導を導入し実践することにより「出来ない子を出来るようにして、出来る子を満足させること」を意識した授業を追究することができた。打ち合わせの時間を通して、教師一人一人がもつ授業に対する考え方や意見を学年間や教師間で交流できるようになった。 情報交換を通して子供たちへの理解が深まった。 単元毎に指導者を変えたり、「ふりかえりカード」を用いて自己評価に取り組ませたりしたことにより、クラス以外の児童も複数の教師の目で多面的に見て理解し指導していこうとする意識が高まった。よって子供たち一人一人の理解度や思いを今まで以上に十分に捉え、以後の指導の改善に生かすことができた。</p>

2. 今後の課題

<p>課題 打ち合わせの時間を保障する。 複数の教師が関わって指導にあたるので、効果的な指導を進めるためには、教材研究や指導法の検討、児童の実態把握等の情報交換を行う時間を保障していく必要がある。本年度は、月別予定表に打ち合わせ（少人数指導）をする時間を位置付けたり、校内研修の時間に打ち合わせの時間をできる限り確保したりするように努力したが、絶対的な時間が不足してしまった。 教師の指導力の向上を図る。 子供たちはコースをその特徴で選択することがほとんどだが、教師で選ぶ子も中にはいる。また、今後このような傾向が大きくなるかもしれない。どのコースを選んでも学力の向上が図れるように教師の指導力を高めるための学習指導法の研究を進めていきたい。特に、下位の子供たちの指導者には、力のある教師を配置していく必要があると考える。 学習の基本的な確認事項（ノートの使い方、定規の使用等）の統一を図る。 コースによって指導を変えたり担当を変えたりしていくことは、習熟度別学習においては重要な要素である。だが、学習用具の使い方は統一しておかないと、子供たちが戸惑い、指導者が変わる毎にその指導者のやり方で繰り返し指導し直さなければならない。子供の事実によく目を向け、効果的な学習用具等の使用の統一を図っていきたい。 学習形態・コース編制の在り方を児童の実態にあったものにする。 どのような指導や学習形態が有効であるかは児童の実態によって大きく左右させる。本年度は（6学年では）全単元を初めからコースに分けて習熟度別少人数指導を行ってきた。単元の内容や児童の実態によっては、T Tや一斉指導から入った方がよかった内容があったかもしれない。教員間で意見交換を密にし、来年度に向けて更に望ましいコース分けや指導計画を見直し改善していきたい。 次年度の取組 学力テストやアンケート結果から、児童のつまずきの傾向を洗い出し、その結果分析をもとにして、習熟の程度の差に応じた学習教材の開発に取り組んでいきたい。 保護者との意思疎通や習熟度別学習の理解を深めるために、学習の様子や成果をデータとして「算数だより」やWebページ等で積極的に示していく。 授業や朝学習の時間の充実、宿題等の家庭学習時間の確保等を通して、基礎学力の向上を目指した学習習慣の確立を図っていきたい。</p>
--

学力等把握のための学校としての取組

N R T 教研式学力検査（国語・算数）全学年対象 2月末実施予定

フロンティアスクールとしての研究成果の普及

<ul style="list-style-type: none"> ・Webページに校内研究のサイトを設け、研究成果を掲載していく。 ・11月28日に公開授業、授業研究会を行い、地区内外に成果の普及を図った。

次の項目ごとに、該当する箇所をチェックすること。（複数チェック可）

- | | | | |
|----------------------|----------------------------------|-----------------------|--------------------------------|
| 【新規校・継続校】 | ■ 15年度からの新規校 | □ 14年度からの継続校 | |
| 【学校規模】 | □ 6学級以下
□ 13～18学級
□ 25学級以上 | □ 7～12学級
■ 19～24学級 | |
| 【指導体制】 | ■ 少人数指導
■ 一部教科担任制 | □ T・Tによる指導
□ その他 | |
| 【研究教科】 | □ 国語
□ 生活
□ 体育 | □ 社会
□ 音楽
□ その他 | ■ 算数
□ 理科
□ 図画工作
□ 家庭 |
| 【指導方法の工夫改善に関わる加配の有無】 | ■ 有 | □ 無 | |